

## 未来づくりワークショップの取り組み

東海翔（宮崎大学地域資源創成学部）

手束梨音（宮崎大学地域資源創成学部）

広瀬梨奈（宮崎大学地域資源創成学部）

松岡崇暢（宮崎大学地域資源創成学部）

### 1. はじめに

宮崎県綾町は、豊かな自然を有し環境に配慮しながら生活を営んできた歴史がある。昭和後期頃まで、農業や林業による昔ながらの自給自足による生活を送ってきた。生計の中心は林業により得られたが、機械化の影響を強く受け雇用は大きく減少した。そのため、地域経済は著しく落ち込み働き盛り世代は町外に職を求め、子ども世代は集団就職で他県へと流失した。大規模な人口減少を揶揄し夜逃げの町と言われることもあった。

打開策として目先の雇用確保ではなく、将来を見据えて自然共生と経済発展を目指すことになった。目先の利益であった照葉樹林の伐採計画を阻止し、照葉樹林に育まれた有機農業、持続的な観光資源開発、食品会社の誘致による地域経済振興を図ってきた。なお、食品会社は、綾町の豊かな自然環境を有していることから選ばれている。次に、自治公民館活動を展開することで、住民主体の地域づくりを取り組んできた。進学や就職を機に一定数の町外転出者は存在するが、町内への移住希望者を受け入れることで1970年代後半から人口は7000人台をキープしてきた。しかしながら住民の高齢化は進み、中山間地域に位置する地区の中には限界集落化が顕在してきたのである。

高齢住民の多くは、自給自足の生活を営み地域独自の文化や伝統を継承してきた。特に、中山間地域の地区住民が担ってきた普請、結いの心、祭、神事、郷土料理などを後世に引き継い

でいくことは喫緊の課題である。そこで、綾町と宮崎大学地域資源創成学部農村社会学研究室は、2020年から協働で集落の記録や記憶を残しつつないでいく「綾の肖像プロジェクト」に取り組んでいる。住民が大事に保管してきた綾町内で撮影された写真を見ながら地域の風景や暮らしなどを聞き取り調査した。また、10年後も地区で今までと同じ生活が送れるように地域課題の発見と解決に向けた支援策を示した「集落ビジョンの策定」に取り組んできた。

「綾の肖像プロジェクト」と「集落ビジョンの策定」は、消滅が危惧される町内の限界集落や集落住民を対象とし、古き良き綾の暮らしをデータとして残し10年後も希望する住民が住み続けていける方向性を示したものである。活動の意義は大きいだが、人口減少や高齢化の進行により地域としての活力が失われつつあるのが現状であろう。そこで、未来ある綾中の中学生を対象に「未来づくりワークショップ」を実施した。将来に向けて地域の活力向上につなげるため、ワークショップでは20年後の綾町で住み続けていくために必要なことを中学生と大学生が一緒になって考えた。ワークショップの詳細は順を追って説明していく。

### 2. 事業概要、方法

綾町未来づくりワークショップは、人口減少や高齢化の進行により地域としての活力が失われつつある現状の中で、現在と未来に焦点を当て綾町のもつ地域資源やそれを地域の活力

向上のために活用する考えを発見・共有することで、後世に綾町の地域資源を残していく事を目的の1つとした。

本ワークショップは、綾中学校の2年生78名と宮崎大学地域資源創成学部農村社会学研究室18名を対象に綾町の魅力を後世に残し続けるためには何が必要なのかを考えるために開講した。

ワークショップでは、模造紙と付箋を使ったKJ法<sup>(1)</sup>を用いて3つのワークを行った。KJ法により、付箋に1つずつ情報を記し、それらをグルーピング化することでアイデアの言語化や可視化を通じた分析を行った。中学生によって記述された付箋の情報は、大学生が主導しながらグルーピングし、模造紙上に添付した。それぞれのワークの終盤には、各グループ内で取り組んだ情報を全体で発表し共有された。

ワーク1では、SWOT分析<sup>(2)</sup>の手法を用い、中学生が感じ取っている綾町の現状把握を目的とした。修学旅行直後の中学生を対象にする

ことで、修学旅行先と綾町の比較をしながら改めて綾町の良いところや悪いところを実感してもらおうことも期待した。さらに、悪いところを改善することで良いところに変えていく発想の転換や可能性を実感してもらおうことも目的とした。ワーク2では、20年後の綾町で発生し得る問題を予測し、将来困らないために中学生が「今」から行わなければならない課題の発見を目的とした。また、「今」の綾町の誇れる点を同時に探し、それを20年後も同じように誇れるために何をすべきか考えた。ワーク3では、20年後まで誇れる綾町の魅力を発見・共有することを目的とした。誇り続けるために、やるべきこと・できることを考えてもらった。なお、当日のタイムスケジュールは表1にて示す。

### 3. SWOT分析の内容と結果

本章では、ワーク1で実施したSWOT分析の結果を表にまとめ、中学生の考える綾町の現状を明らかにする。表2は、全12班の模造紙をデータ化し、S(強み)、W(弱み)、O(機会)、T(脅威)の項目ごとに整理したものである。なお表の右列には、ワークショップで特に多く挙げられ、印象的であった意見を取り上げまとめることとする。

表1 ワークショップのタイムスケジュール

スケジュール	実施内容
9:00	綾中学校訪問
9:00~9:20	全体挨拶 準備
9:20~9:35	趣旨説明 学生紹介
9:35~10:05	ワーク1 SWOT分析
10:05~10:15	休憩
10:15~10:55	ワーク2 住み続けていきたい未来の綾
10:55~11:45	ワーク3 誇れる綾
11:45~11:55	休憩
11:55~12:10	共有の報告会
12:10~12:15	講評

筆者により作成



図1 取り組み風景

表 2 SWOT 分析の結果

No.	S	W	O	T	印象的な意見
No. 1	自然	交通の不便さ	SDGs への関心	若者流出	天体観測ができる
No. 2	有機農業	店の少なさ	スポーツキャンプ	動物の出没	運動施設の多さ
No. 3	自然	交通の不便さ	移住者	記載なし	水が美味しい
No. 4	自然	店の少なさ	祭り	森林伐採	生き物が多い
No. 5	自然	店の少なさ	SNS	森林伐採	事故が少ない
No. 6	伝統工芸	店の少なさ	行事の増加	人口減少	外国人観光客が多い
No. 7	自然	観光客の少なさ	健康志向	感染症	全国トップの野菜
No. 8	自然	店の少なさ	移住者	記載なし	ほんものセンター
No. 9	自然	交通の不便さ	移住者	他地域への移住	地価の低さ
No. 10	自然	店の少なさ	伝統工芸の注目	他地域の伝統工芸	有機野菜の給食
No. 11	自然	店の少なさ	SNS	森林伐採	有機野菜は安心安全
No. 12	自然	店の少なさ	メディア活用	移住者	大人がやさしい

筆者により作成

表 2 の分析結果をふまえ、考えられることとしては以下の 2 点が挙げられる。

第 1 に、中学生たちは日常生活において自然



図 2 ワーク 1 模造紙例

の豊かさ、美しさに触れる機会が多いということだ。

ワーク 1 では、全 12 班のうち 10 の班が、照葉樹林や水といった自然に関する項目を S(強み)として挙げていた。またワーク中の会話から、中学時代に植樹活動に参加したといった、自然との触れあいに関する経験があることが明らかとなった。つまり、綾町の自然が強みであると認識している中学生が多いのは、中学生の段階で綾町の自然に触れる機会が多く、その価値について理解を深められているからであると推測する。

第 2 に、中学生たちは O(外部の機会)として挙げた項目でも、見方を変えることで T(外部の脅威)になりうるという視点を備えているということだ。複数の班において、O(外部の機会)と

して移住者の増加や伝統工芸への注目といった意見が挙げられた一方、T(外部の脅威)として移住者増加による土地の減少や、伝統工芸への注目から他市町村との競合が発生するといった、注目している対象が同じでも異なる分類がされていた。さらにこれらの視点の異なる意見が同じ班の中で見られていたことから、中学生たちはプラスに思われる状況を別の角度で捉え、時に脅威にもなりうる視点を備えているのだと推測する。またこれらは、日頃の学習環境や地域に関する学習の充実などの要因によるものだとも考えられ、綾町の中学生は普段の学習から1つの物事を多様な角度で捉えられているのだと考える。

#### 4. 住み続けていきたい未来の綾の内容と結果

本章ではワーク2で行った未来予測ワークショップの結果を用いて、中学生が考えた将来綾町に住み続けるために必要なことを明らかにする。

表3は全12班の模造紙をデータ化したものである。20年後の綾町の課題として考えられることを「テーマ」、その具体例を「困りごと」、それらに対する対策を「解決方法」、将来の理想の綾町を「どんな未来」として表記する。ワーク2の分析結果から明らかになったこととして以下の2点を挙げる。

1点目は、人口減少を重要な課題として捉える中学生が多いことである。12班中7班が人口減少をテーマとして挙げていることから、多くの中学生が将来の綾町の人口減少を危惧していると推測できる。その中でも道路整備や店の運営、照葉樹林の管理などの中心を担う生産年齢人口の減少を課題と考えている中学生が多く見られた。また具体的な課題として荒地の増加や町の荒廃という意見も出た。このことから道路や店など自分たちの生活に必要なインフ

ラストラクチャーが維持できなくなることで暮らしにくくなり、町全体が荒廃していくのではないかと考えている中学生が多いと推測する。

2点目は将来を担う若者の力が必要だと考えている中学生が多いことである。困りごとへの対策を行った上で将来訪れて欲しい綾町のキャッチフレーズについて、12班中7班で子ども・若者などの言葉が見られる。このことから現状のままでは若者世代の人口減少が危惧されるため、子どもや若者世代が中心となって綾町を運営していけるような制度づくりが必要であると考えている主体性のある中学生が多いと推測する。さらに現状の困りごとに対する解決策として、新施設の建設という意見が複数あった。

新施設としては、教育機関や仕事場など地元住民向けの施設と宿泊施設や遊ぶ場所など町外からの観光客向けの施設が挙げられていた。特に地元住民向けの施設について、子育てにおいて必要な教育施設の建設が望まれていたことから若者世代の人口を維持・増加していくために、子育てがしやすい環境づくりが重要であると考えている中学生が多いことが明らかになった。



図3 ワーク2 模造紙例

表3 将来も綾町に住み続けるために必要な事

No	テーマ	困りごと	解決方法	どんな未来	備考
No. 1	人口減少	管理者不足	綾の食材のPR	遊べる綾	※管理者例 ・ 照葉樹林 ・ 道路等
No. 2	綾に関わる人が少ない	・ 人口減少 ・ 荒地の増加	・ 新施設建設 ・ 綾の宣伝	綾の未来は若者次第	※施設例 ・ 教育機関 ・ 宿泊施設
No. 3	人口減少	荒地の増加	・ 他地域と協力 ・ AI 導入	若者が輝ける町	
No. 4	人口減少	施設が無くなる	・ 新施設建設 ・ SNS で宣伝	若者が活躍する豊かな綾町	※施設例 ・ 店 ・ 教育機関
No. 5	人口減少	・ 治安の悪化 ・ 少子高齢化	安全安心なまちづくり	魅力を進化させ、発信し続ける	
No. 6	介護者不足	高齢者の暮らしの不便さ	・ 町のPR ・ 教育機会増加 ・ 安全確保	お年寄りが安心して暮らせる“幸せ”な未来	
No. 7	自然破壊	・ 環境汚染 ・ 伝統継承の危機	・ 自然保全 ・ ゴミを減らす	世界を知り、伝えよう綾の魅力	
No. 8	人口減少	生活に必要な施設が無くなる	新施設建設	未設定	※施設例 ・ 職場 ・ 遊び場
No. 9	人口減少	町の荒廃	・ 子育て支援 ・ 魅力創出	子供が安心できる未来	
No. 10	少子高齢化	後継者不足	子育てしやすい町づくり	子供達主体で綾町をよくなる町	
No. 11	人口減少	・ 町の消滅 ・ 荒地の増加	イベントを増やす	若者が好む町づくり	
No. 12	若者の流出	生産年齢人口の減少	新施設建設	若さが未来を創る町、綾町	※施設例 ・ 教育機関 ・ 宿泊施設

筆者により作成

表4 ワーク3 20年後も残したい綾町の魅力

NO	テーマ	今すべきこと	自分・みんなができる事
No. 1	自然	<ul style="list-style-type: none"> <li>・環境負荷軽減</li> <li>・動植物保護</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・育樹ボランティア</li> <li>・照葉樹学習</li> </ul>
No. 2	人柄の良さ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・近所づきあい</li> <li>・交流行事</li> <li>・ボランティア</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・挨拶</li> <li>・行事への積極的な参加</li> <li>・交流行事の存在</li> </ul>
No. 3	自然	<ul style="list-style-type: none"> <li>・森林保護条約</li> <li>・森林保全</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ゴミ削減</li> <li>・3R実践</li> </ul>
No. 4	自然と伝統の保護	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報普及</li> <li>・植樹</li> <li>・有機農業の維持継承</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・環境負荷軽減</li> <li>・行事参加</li> <li>・地域学習</li> </ul>
No. 5	自然	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報発信</li> <li>・水資源保護</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・廃棄物削減</li> <li>・SNS 発信</li> </ul>
No. 6	有機農業	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報発信</li> <li>・後継者育成</li> <li>・学校での農業体験</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・SNS での発信</li> <li>・イベント参加</li> <li>・公民活動維持</li> </ul>
No. 7	人柄の良さ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・交流の場を増やす</li> <li>・信頼関係</li> <li>・伝統工芸保護</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・挨拶運動</li> <li>・感謝</li> <li>・イベント参加</li> </ul>
No. 8	自然	<ul style="list-style-type: none"> <li>・森林管理</li> <li>・有機農業の維持</li> <li>・植樹</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・植樹イベント</li> <li>・公民館文化祭</li> <li>・ゴミ拾い、分別</li> </ul>
No. 9	自然	<ul style="list-style-type: none"> <li>・森林が維持管理される状況・森林保護・ゴミ拾い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自治活動</li> <li>・植樹ボランティア</li> <li>・ごみ拾い</li> </ul>
No. 10	自然	<ul style="list-style-type: none"> <li>・植樹活動</li> <li>・森林教育</li> <li>・森林情報の発信</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・SNS での情報発信</li> <li>・ボランティア参加</li> <li>・照葉樹林学習</li> </ul>
No. 11	自然	<ul style="list-style-type: none"> <li>・植樹ボランティア</li> <li>・森林管理</li> <li>・ゴミの削減</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ボランティアへの参加</li> <li>・ゴミ処理</li> </ul>
No. 12	自然	<ul style="list-style-type: none"> <li>・森林保護</li> <li>・行事参加</li> <li>・植樹</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ゴミ分別</li> <li>・ボランティア</li> <li>・環境負荷軽減</li> </ul>

筆者により作成

## 5. 誇れる綾内容と結果

ワーク3は、20年後も残したい綾町の魅力を発見・共有することを目的に行い、表4にて示した。各グループが綾町の誇れる点を1つテーマとして掲げ、それを維持発展するために今すべきこと、自分とみんなが出来ることを共有した。表4は、全12班の模造紙をデータ化した表である。20年後の誇れる綾町を「テーマ」、今から取り組むことを「今すべきこと」、自分ができること・みんなが出来ることを「自分・みんなができること」として表記する。

20年後も残したい綾町の魅力の「テーマ」として、12班中8班が自然を設定している。それらのグループが20年後も綾町の自然を残していくために「今すべきこと」として、環境負荷軽減、森林保護条約等の法的な視点、適切な森林管理・水源整備の視点から意見が述べられた。また、それらの発展のために「自分・みんなができること」として、廃棄物削減や防災学習を行う公民館活動への参加、植樹イベント・照葉樹林学習への参加が挙げられた。特に植樹ボランティアへの参加を挙げるグループが多かった。参加した学生によると、綾町の照葉樹林について学び、実際に植樹する機会があるという。実際に植樹活動を通し地域の魅力の維持発展に携わることで、地域の魅力を自然と捉えるマインドが醸成されたと考察する。

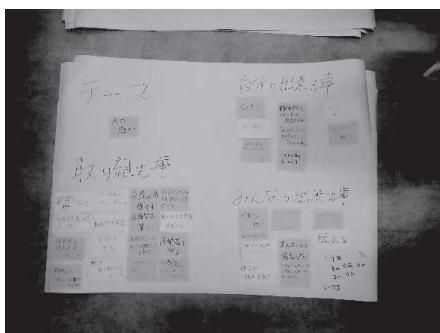


図4 ワーク3 模造紙例



図5 ワークショップ作業

次いで挙げられた「テーマ」として多かったのは、人柄の良さである。2つのグループがテーマとして掲げていた。それらのチームが「今すべきこと」として、交流行事や近所付き合いを通し信頼関係を築くことを挙げていた。具体的には、あいさつによって近所づきあいを増やすことや交流行事を絶やさないと挙げられた。しかし、行事への参加状況を聞いた7班では、班員6名のうち中学校の授業以外で交流行事に参加した学生は1名と限られており、中学生の交流イベント参加はかなり少ない印象を受けた。

有機農業を「テーマ」として掲げたグループでは、「今すべきこと」として有機農業を町外へ発信する事、有機農業の後継者を育成する事、有機農業に関する教育の展開を挙げていた。特に町外への発信では、SNS等での活動やイベント参加を挙げていた。また、有機農業に関する教育の展開では教育現場以外にも自治公民館活動での農業体験も挙げられていた。

伝統工芸を「テーマ」の1部として掲げるグループもあった。このグループでは、照葉樹林によって育まれた文化伝統の普及を「今すべきこと」として挙げていた。また、地域学習や行事への参加によって自分たちが継承に携わることができると考えていた。

## 6. 考察

今回、実施した「未来づくりワークショップ」では将来に向けて地域の活力向上につなげるために必要なことを中学生と大学生が一緒になって考えた。綾町の未来を担う綾中学校の中学生を対象にワークショップを行うことで、20年後の綾町に住み続けていくために必要なことを明らかにした。

まず、ワーク1を通して、中学生が綾町の自然を強みとして理解していることが明らかになった。理解の背景には、中学校1年次に行った植樹活動の経験があると考えられ、自然との関わりを持つ経験が、自然を地域資源として認識するきっかけになっていると考察する。その意味で、植樹活動は、大きく評価できるだろう。また、ワーク3では20年後も誇りたい綾町の魅力として自然が多く挙げられた。よって、ワーク1とワーク3を通し、中学生は今ある自然を将来までも残し続けたいと考えていることが推測できる。一方で、ワーク2から、人口減少を危惧していることも分かった。中学生は、このまま人口減少が進行することで森林を管理する人も減り、今のままの自然が残らないことも理解している。

20年後も誇れる綾に住み続けるためには、人口減少への対処をしたうえで、自然を残し続けるための取り組みを行うことが求められている。今ある魅力的な自然を強みとして捉え、子どもや若者世代が中心となって綾町のこれからを担っていくという主体性は見られたものの、将来的に彼ら自身が自然を守る担い手になりたいという思いはあまり感じられなかった。今後、彼らは様々なライフステージの変化がある。その中で綾町に残り、住み続けるという実感が持てないのかもしれない。今後の人生経験の中で、感情の変化につながることを期待したい。綾町の自然を今後も残し続けるためには、その担い手としての意識を中学生に対して認



図6 成果報告

識させる必要がある。

## 7. 感想

今回のワークショップは、参加した宮崎大学農村社会学研究室の学生にとっても新たな刺激を得られる機会であった。中学生と共にワークショップに参加することで、綾町民目線から見える綾町の魅力と将来に対する不安を深く実感できた。特にこれからの綾町の未来を担う若者を対象としたことで、不安要素の原因が明らかになった。今後も綾町をフィールドにした調査は続く。今回のワークショップで得られた刺激を、綾町の未来の活力向上につながるよう活用したい。



図7 農村社会学研究室メンバー



## 謝辞

本ワークショップの開催にあたり、多くの方々にご支援いただきました。ご協力いただいた皆様に心から感謝いたします。

綾中学校の教職員の皆様には、日程の調整、開催場所のご提供をしていただき、厚くお礼申し上げます。綾中学校2年生の皆様には、ワークショップへ参加をしていただき、中学生の視点から様々な意見を頂きました。心から感謝申し上げます。綾町教育委員会および綾町役場のご支援を頂きありがとうございます。

## —— 注 ——

- 1) KJ法とは、断片的な情報やアイデアを効率的に整理する為に用いられる手法の1つである。KJ法では付箋に1つ1つの情報を記し、その付箋を並び替えることで情報を整理する。
- 2) SWOT分析とは、対象を強み、弱み、機会、脅威の4つのカテゴリーで要因分析し、事業環境変化に対応した資源の最適活用を図る経営戦略策定方法の1つである。